

夜の狼 (十一卷)

帝キネ時代映畫

原作者 上島 量  
監督 佐藤樹一  
撮影者 高橋武則  
主演者 松本田三郎  
久野あかね

紹介 第三百二十一號

林不忘の「つれ鳥羽玉」と似通つた此の物語はかなり多くの事件を盛り、怪奇なる人物を出現させ乍ら、それ程の効果と迫力を持つてゐなかつた。全體拾一巻もの長篇であり乍ら殊更なスリルを盛り、クライマックスを持たなかつたことが何よりも惜しいことであつた。痺れ薬を悪人の手先になつてゐるお益が酒に入れた主人公に吞ませるが、直ぐに醒めて次の瞬間には奮然刀を取つて闘ふ等さいふ時間的且つ常識的な矛盾は第二として、盛り過ぎた興味や其の探偵的趣向の整理がついてゐない。蘭登の邸内の支怪味も皮相であり、怪人の出現も意味がない場ふさぎの感である。各場面が緊張に缺けてゐる。冗漫であつてましまりが無い。少くとも是程の事件を盛つたもの、これ程のキヤットを持つたものを完成するには實に監督者の責任である。俳優が拙くとも監督の整理の手腕で充分成巧するものである。にも係らず是は失敗だつた。全篇が餘りに平面的に構成され、何等の緩急調もないのが何よりも此の作品の致命的な失敗であつた。ラストの火車場など見せなくともよい贅褫で且つ蛇足そのものだつた。田三郎君に此の種ものを演らせるのも大いに考へものだと思ふ。——水町 青磁——  
興行價値——キヤットと其の長篇だと云ふので呼べるが、觀後左程に受けるものとも思へない  
(二月一日 大阪芦邊劇場、神戸相生座)